

# あしたの日本へ

**長尾さん** そうです。病気になつた途端に普通の生活ができなくなつる。病院に入つたら、いまは新型コロナウイルス禍で、愛する人家族や友人と面会することさえできぬ。そんな殺生な。

在宅なら、一緒に寄り添つて寝ることができる。亡くなる直前まで家族は肌をさすつてあげられる。だからコロナ禍の下、在宅医療の見直しが叫ばれています。

——映画では、主人公で、自分の未熟な対応によって「患者が苦しみながら息を引き取つた」と悔恨の念にさいなまれる若き在宅医を

病で入退院を繰り返し 大量の薬を投与され、苦しみ、私が高校3年のとき、この世を去りました。それ以来、「人に寄り添うことができる町医者になりたい」と思うようになりました。

——ご自身が言う「最高の医療」とは。

長尾さん 痛みがあまりない。おしゃべりができる、笑える。そういう状態を保つことが、最高なのです。

——戦時下もそうだったそうですが、戦争本営者は「当時の前の生



**長尾さん** これまで本に書いてきたことが、映画という形でみんなさんに伝えられたという気持ちですね。先輩在宅医は、私をモデルにしているそうですが、奥田さんが発する言葉は何一つ無駄がない。「カルテではなく人をみろ」などはまさにそうです。「人生会議なんていう国策はあるけれど、おれたちはずつと前からやつてたるぜ」というようなセリフもあります。

・プランニング（ACP）のこと  
で、患者さんの価値観を重視し、  
どこでどんな医療、ケアを受け、  
どのような最期を迎えたいかをご  
本人と一緒に考える。でも、これ  
は国策に關係なく、医療の基本で  
す。一方的に医師が説明して、「何  
か質問がありますか」と最後に聞  
く。そういう診療では、患者さん  
との対話は難しい。  
——主人公が新たに担当する末期  
の肝臓がん患者は宇崎竜童さんが

長尾さくら 人の命を救ひたる仕事を  
しよう。医学部の学生、研修医は、死をタブー視しないでほしい。人間としての尊厳を保ちながら穏やかな最期を迎えてもらう。そんな地域医療を目指している医師、医療従事者がいるということを知つてもらいたい。

死はゴールではなく人生の通過点、すなわち、生きるも死ぬも表裏一体。最期までその人らしく生きられる医療をつくることが私の目標です。

長尾さん 宇崎さんはいま、75歳。やはり「死について考えている」そうですよ。この患者が死を前にして詠む川柳は、高橋伴明監督が自ら考えたものですが、高橋監督は「リビングウイル（尊厳死）を押しつける映画ではない」とおっしゃっている。私もそうです。在宅医療は一つの医療のあり方。なかには「病院にいたい」という人もいる。

ただし、国はこの30年、在宅医療に関して憂慮してきました。その結果、医療の質がどうなったかを考えてほしい。

——これから医師を目指す人への提言は。

# 患者の自由を尊重する終末期医療の実現を

## 在宅医療に取り組む医師 長尾 和宏さん

「人生100年時代」が近づき、シニアの生き方についで関心が高まる一方で、人生の終末期を迎えた人は、「限りある日々をどう過ごすか」という問題に直面している。この春公開された映画「痛くない死に方」の原作者で、兵庫県尼崎市を拠点に在宅医療に取り組む医師、長尾和宏さん（62）は、「たとえ病気になつても最期まで好きなことができる。患者の『自由』を尊重し、支えるのが在宅医の一つの役目」と語る。

（聞き手 本誌・明珍美紀）

——映画のタイトルになつたもう一冊の「痛くない死に方」は、長尾さん　がんや心不全、認知症などを含め、これまで約2000人を看取つた体験から、痛くない、あるいは苦しくない人生の終わり方がどういうものかを「平穏死」という視点からまとめました。

——「平穏死」とは。

長尾さん　過剰な延命治療をせず、自然に任せたその先にある人生の終わり。自然死、尊厳死という言い方もされています。といつても、まったく何もしない訳ではなく、痛ければ、痛み止めを使つて苦痛を和らげます。緩和ケアは

かつて日本では、こうした死が当たり前でした。自宅で最期を迎えていたわけですね。ところが1970年代半ばになると、病院・診療所の方が上回る。医学の進歩で、さまざまな延命治療が可能になつたことが背景にあります。

実際に私が医師になつた80年代は、末期のがん患者にも人工呼吸器を付け、自分も大学病院時代、延命のために手を尽くしていました。関連の救急病院では、次々に終末期の患者が救急車で運ばれてくる。日々、壮絶な死を目の当たりにする中で、すべての延命措置を拒否する食道がんの患者さんと出会いました。

その男性は点滴をはずしたので、水だけを飲むようになります。体は痩せていくけれど、病院内を自由に歩き回り、院内のボランティア活動にも参加している。そして穏やかに息を引き取りました。初めて「尊厳死」に接しました。——阪神大震災後、「町医者」に転身なさつた。

**長尾さん**　当時、私は市立病院の勤務医でしたが、震災が背中を押したと言えます。私の父は、うつ

毎日フォーラム 日本の選択

# 毎日フォーラム

政策情報誌  
特集  
**就学不明**  
霞が関人物録  
大分県

日本の選択  
5月号

